



門 18 特
號 1833
卷 67

繪本古圖記卷之七目錄

日本之加勢渡海朝鮮國話

石田三成増田大谷等と心謀を謀る國

大廳豊洲之話

大廳吳例の國

右圖大廳を安き給ふ國

右圖西海之難風を避る國

船政と次去湯流せし國

小西外長破盞茶之軍話

柳成龍と定彼と明の舟車と食養とる國

真頭巳六古圖記

明の史儒流九の命を捕らぬ
明軍日本の軍務に終る

我の心して終るる國

沈惟敬説石星詰

沈惟敬鄭曰は倭國の情をばく國

沈惟敬石星に説く國

沈惟敬欺日本勢詰

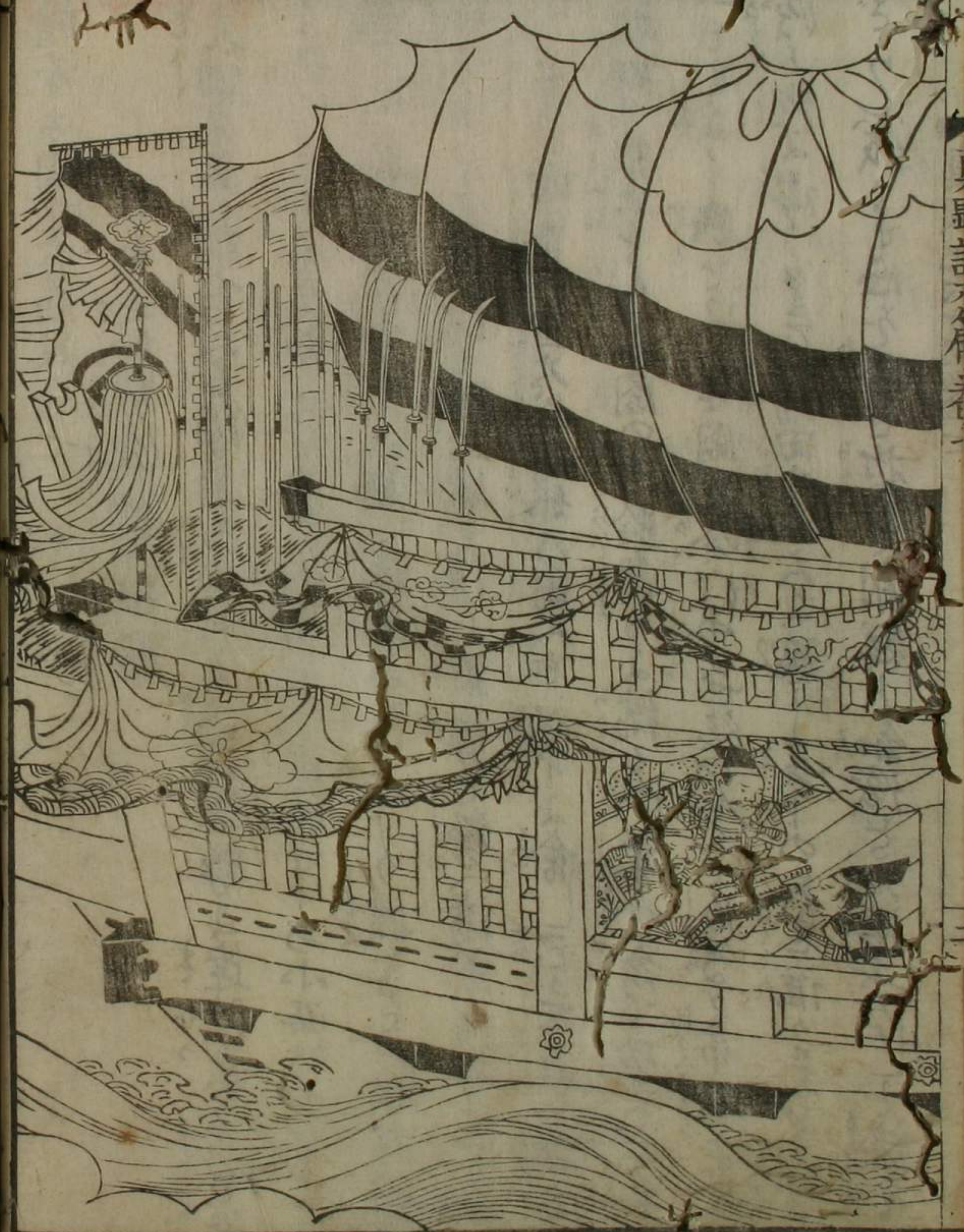
沈惟敬平壤城を奪ひて小西よんを圍

繪本を圖記の篇卷之七

日本之加勢渡海朝鮮國

文禄元年秋七月を圖示る云沖の軍勢は陸奥守の家
を加へて都合其勢七万余人朝鮮國へ渡海せし小西加茂等を
援へし後、諸將各命を應じ肥前平戸をより渡るとし朝鮮國へ
渡きしもの石田治政が浦三成は日く軍勢と勢、諸軍は時、渡海
し、つら増田長盛大谷刑部乃西人と松中又會し己が不在と相治
朝鮮の役止むんば圖の沖齡忽ち編りて、
一日も又く兵とくしを圖長命にあはせ終りんと、
後、つら増田大谷大は感し、
我の心を合せ折言て朝鮮、和後と云結、

石田三成
増田大谷の
両士と
心謀を
図る



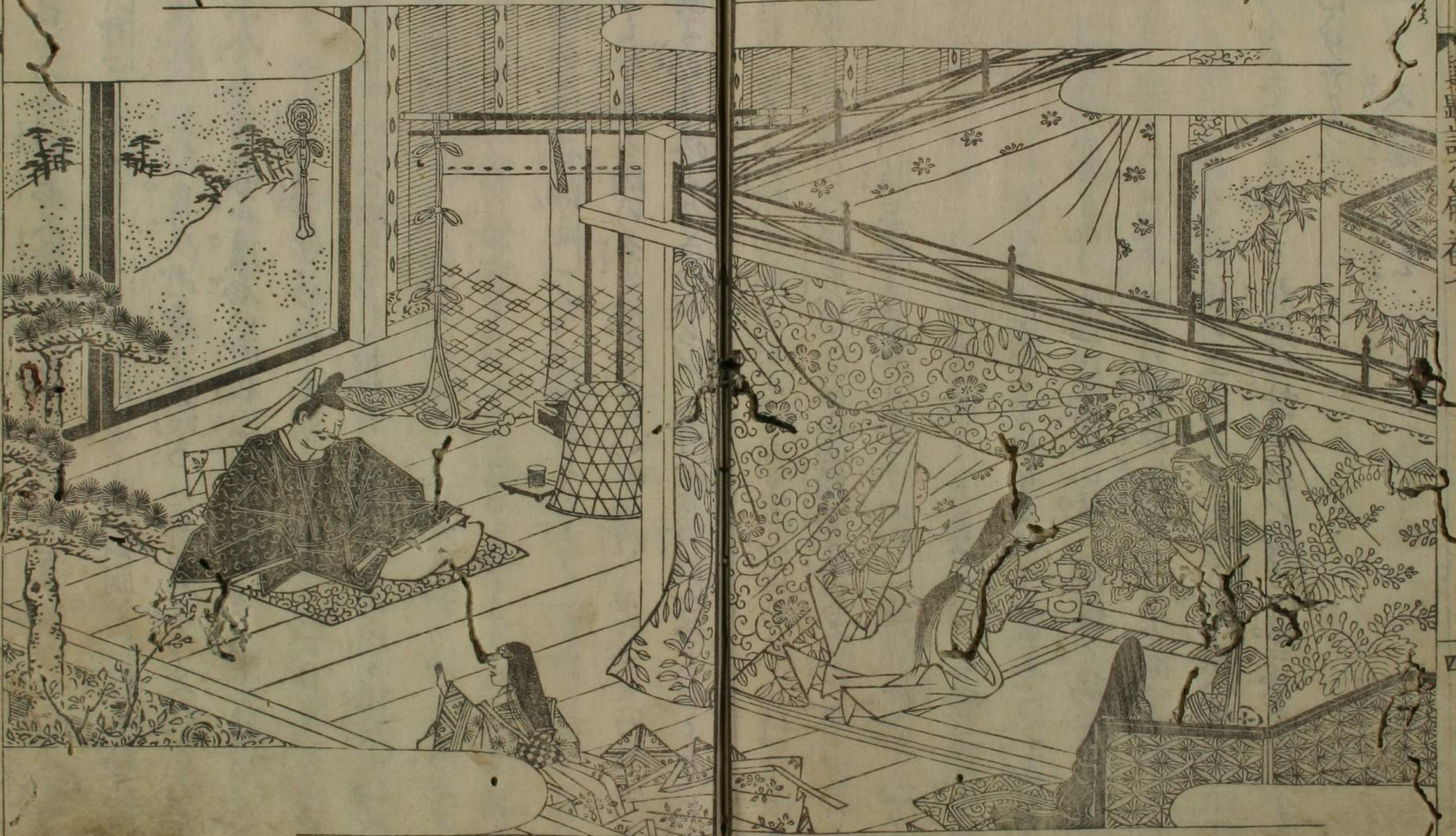
石田三成の船

三城大に欽ひて我と公と曰く世に於ては
潤方は老臣家の御代並く威を以てしとて
勝化のまうらうる愛よ一つの後論あり三城を
と救ひ給らんを欽く思ふ小似く忠臣の
あつらん三城が又智を固く能くし給らん
とて軍略及び平生の御秘傳を悉く見せ給
新後も認り給らんを以て能く固くし給らん
とて固の御云達う又御連枝を以てあらん
固の甲然より能く給ひし御云つまいとて
心よ企て諸事小端の帳中より能く
朝我後いまま如炊福徳に則らん
三城を忌嫌ひ又後君臣にせしめ小西
信の智とて皆三城が裏に入りし時三城
大名に立向はれどもいま人を制し
九列探取ししむき御内意も
は二方の熱大ぬらり右固御化界の
き大志と物なれば今度の朝鮮征伐
世に於ては老臣家の御代並く威を以てし
とらんを思ふと和睦の計を以て
とふりなり

大廳薨去

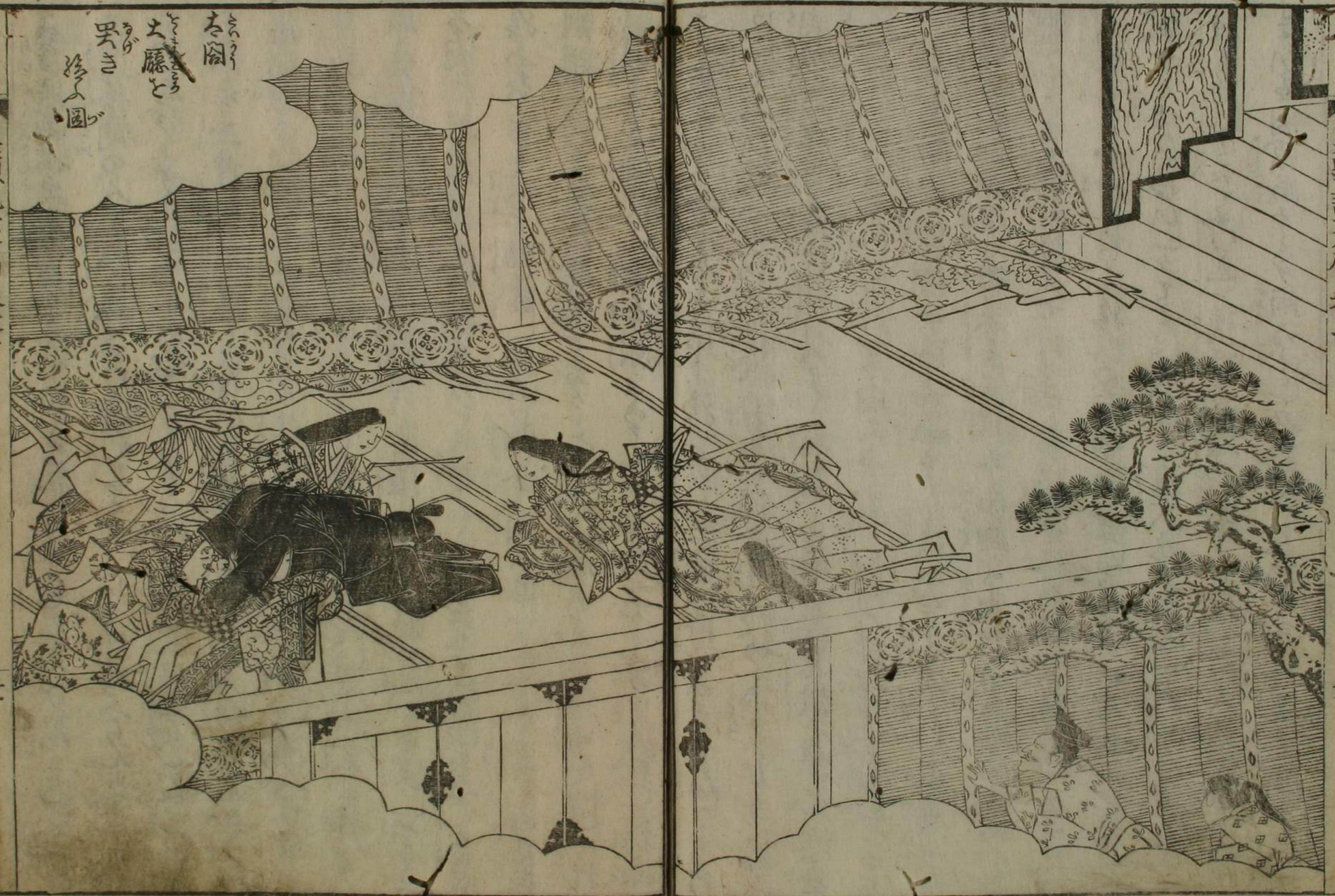
國乃例吳

真蹟言六條卷廿



真蹟言六條卷廿

秀右衛門少將母若大廳と申すはけは時河多既又七旬は請さる
 終ひ河心と申すは方々なる小を圖遠く朝鮮國と征伐し終ひぬと
 廢格の亭又老と有ひ河存する齡多は河才い若く思ふ
 つる小今度ち圖名護屋の河在陣と朝鮮へ渡海し終ひしと思
 たぐく侍女多は向いせ終ひる朝鮮と交わり國は日本と去る
 る里方りぞやを圖ちるく彼國へ渡海する月々論語終る申と
 さらそふたのもち老の才の再會の期と計りしと申すは秋
 き終ふよぞ河側の侍女もまぐくは慰めまいらせと圖は肥前
 名護屋に河在陣はしつ諸國の大名多く朝鮮へ渡りて名護屋と
 つらといとやを圖の才き河才をいふ小將も安子里の彼國を渡
 り國より終るなきやゆめし河心と申すは終るる河と申す
 中二取とて大廳さらふ信ト終るは一向を圖の河才のこそはしつる
 けしつて終るるりらまり終る事き病と申すはたのそあくなり終る
 関向秀次と日次河側のみよく看病し終ひ且急候と申すは名護屋
 表うくと若とせ終ひるればを圖大さ小終る事終ひ別り再相おさ
 とたひ大廳不意の河才の悔りし及びなきはとく名護屋の
 政刑朝鮮の指揮し摩惠多事相多御も委終ひる物と申すは
 都とて急がせ終る七月の末多に急せ終ひる樂城に入らせ終る
 大廳もとや世と舞し終ひぬを圖是と申すはつたきしまごひてある
 後やと申すは終ひしとそとに例と終る終る直長小姓はしてある
 典義の政を右て河才と調せし進め事と申すは終る人地と申すは
 まいる國へ流るる雨乃びし吾朝鮮を代し取らす大廳の死期



大廳と
男
女
の
図

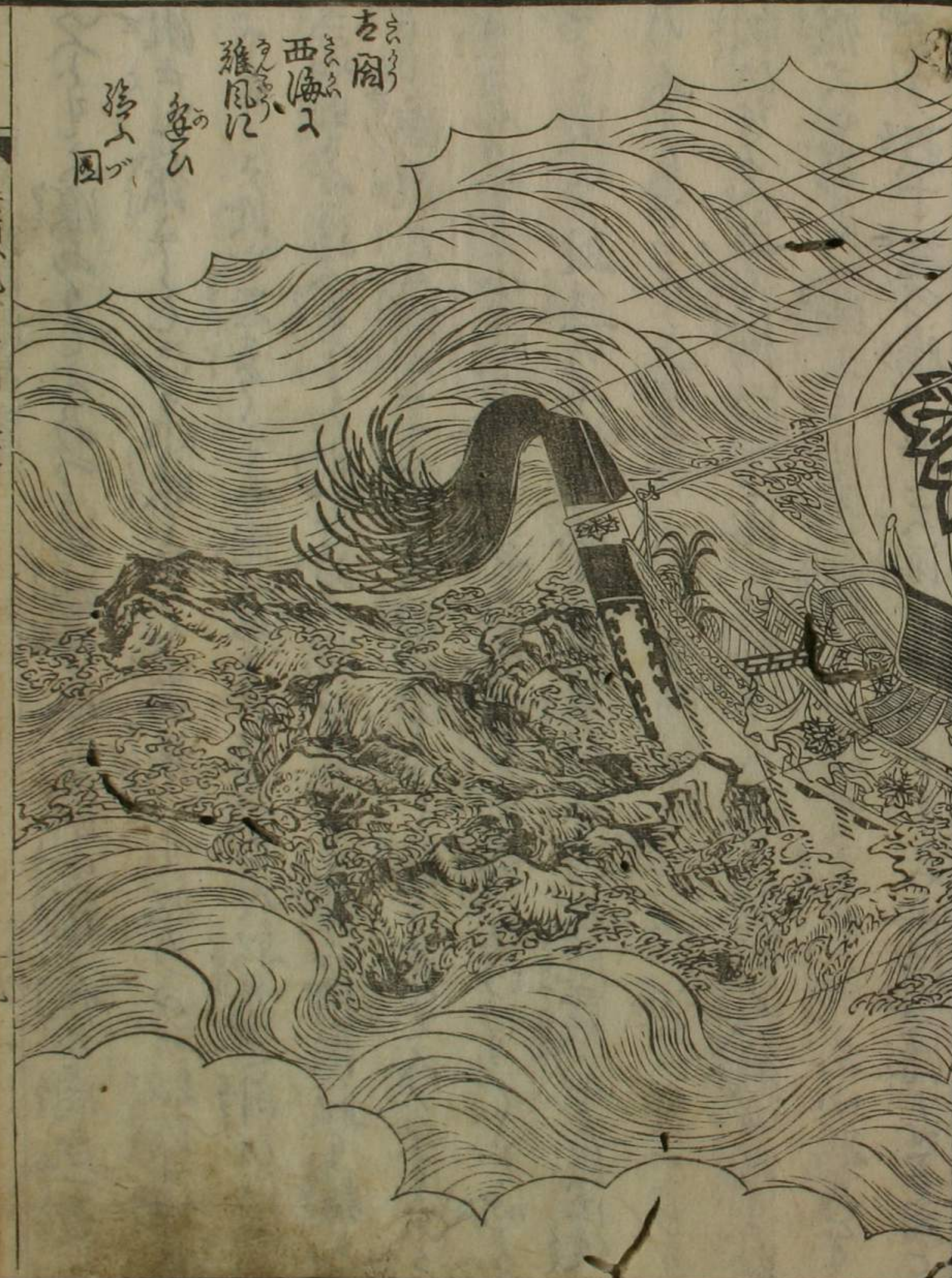
真言宗の佛堂

五

又遠く梅根を止むるに及ぶと痛痺をせ終るに限りは左右
 の近は側の人々激しぬるに御別とこそしつせ終らんと又神
 をどまがりたり初てりぬべきより初は若田玄成法師を以て崇拝
 大徳寺王仲和尚と信じ終ひ葬葬の營とて細やふ終ひ
 終ひ終ひ大徳寺の葬りたり其礼式を若田と盡し諸人の目を
 終ひ終ひかくて同九月中向まを喪ふ龍洲府に御忌を終り
 ぬるに再名護屋表へ御教向の御儀に多し禁延け申候し
 左國朝鮮國へ渡海の條に抄ひての勢く多し以人と御役を以て終せ
 終ふ其若田で勅書に終ひ勅命國に承しとくと多し多くの軍兵
 朝鮮に到り救度勝軍と告るとも大明の兵兵援護とて今終
 勝敗も又計がし若本朝にあり何ぞ居ながら万里の外を指揮

我朝の兵威と外國に耀さんのもよとせ終ひ勅後林林に候
 里終ひかくと慶國のりれ帝感感はしつて御制の御教を
 下し終ふに國難を拜謝し申し候りて名護屋表へ進發ある御儀
 又は毛利老系を多末元在國より先にも御儀ありと上治せ
 しが再び供々に集りたり関白秀次公在京の大小名皆大坂まで送り
 終ひ是より船より北風吹とて西の方へ候し終ひ九月
 廿八日は長門の沖をゆく申し赤間関着渡の瀬戸に御船と漕世
 ぬれ波は山風荒く吹き白浪と多しり瀬で冷じされに御儀の人々
 爰に溜く船ととも風和く候渡るに申し申し申し多し小舟を
 船の船政と治ま湯吻多しある候病なり申すに候し申し候し

西海ノ
雅風ニ
遊ぶ
園

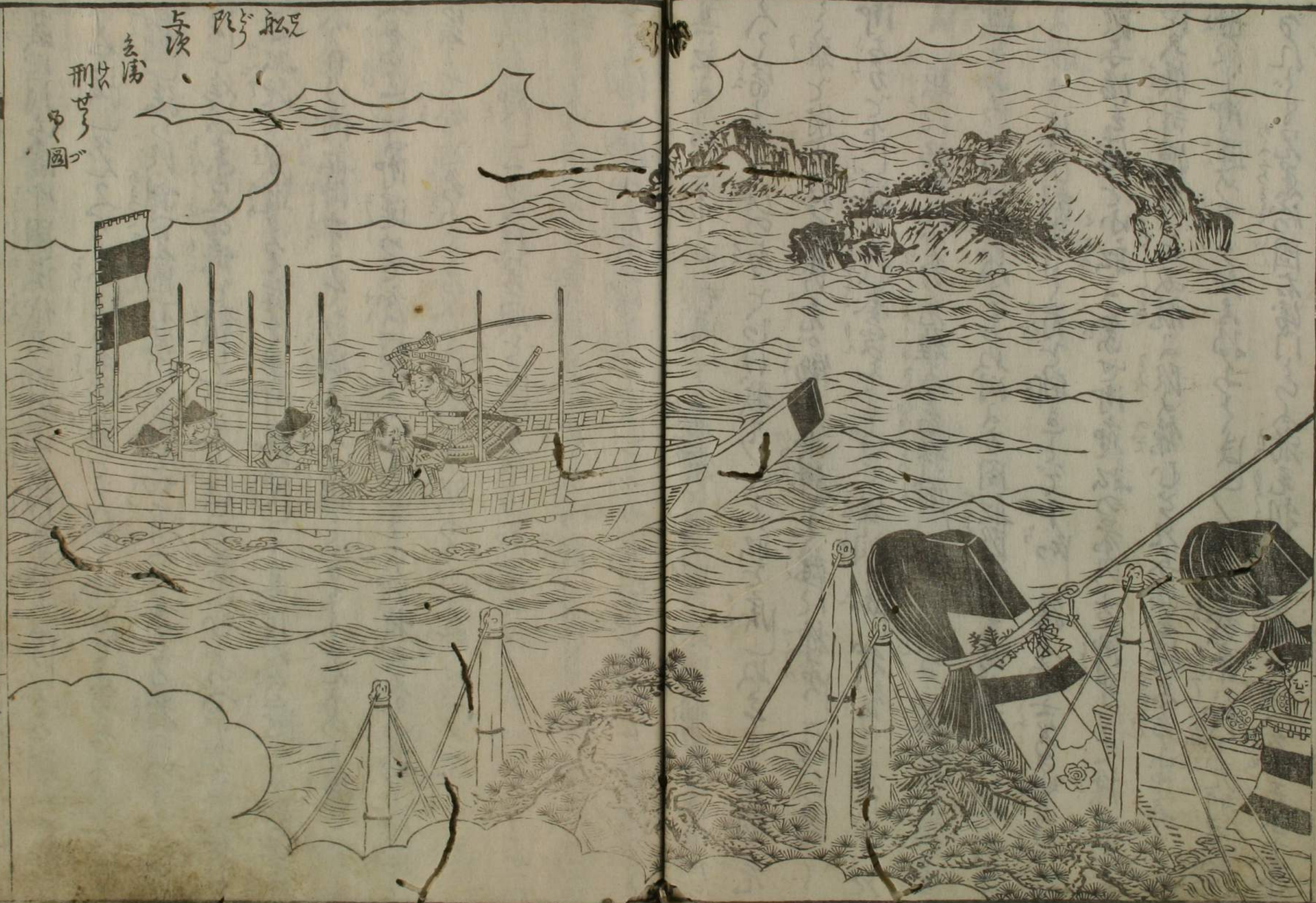


東洋六ヶ所船卷七

つども大浪ありてよ乃つひの海路に逢えし小舟は帆を用き二港に
浪戸を旗つらんといふ小舟はいつ世の浪しし船のつひ船は
よと申さばや悪多しとる図りやせ給ふ所船先き計ひは
ミヤとせ給ふ青とく帆ををりつけて船と飛せば御供船も後と
どと漸浪戸は漕出たり叔り大浪いやさく然り来て人くとい
よとつらるるれ左圖の河原船大岩石の上よ乗るけりくとつら
ぞとよしが船換り方三候は砕け飛んで河原脱履んと此由は
乃人々先と力くつりよくとあせれども運浪のおふふをい
船のつらふべきは細はし左圖の船よりよと尋ね給ひ給ふま
彼大岩の上へ踊り上りて方と流とを給ふま毛利秀元小舟みり
あつり船十挺の橋とて大橋と横切くとる河側へ漕せし圖と

其船よりし糸を船首に繋ぎて買ひに船渡(漕)度せば此の
人々皆よりつひの夢とつげ我もいと船と床にぬそりる図
と難と道と給ひ秀元が働き振舞いと殊に神次給ひまづ
御方よりし賜りね奉安をうけて宰相公我軍は亦其に
は「船に給ふれが秀元難あり候所」をり候と河原清盛
候と申し風のよ給まらぬ所よ左圖船渡と流を給するまひと大き
又傍り給ひ引取り首と斬とぞ申し「給ふ武士等取り彼船
既と流を清を小船よ乗せ河原船の幕の方陣中よと待せんと
は又候計漕出」白双腕と既と條むされ与流を清大舟中より
母はし河原清とて大舟のまはしく候我軍に代り九羽の船
かれども兄軍船圖右邊門とる若毛利屋の西角は使へる天正十年

見船の
次
去
刑
や
國



真頭記
下
冊
卷
七

真頭記
下
冊
卷
七

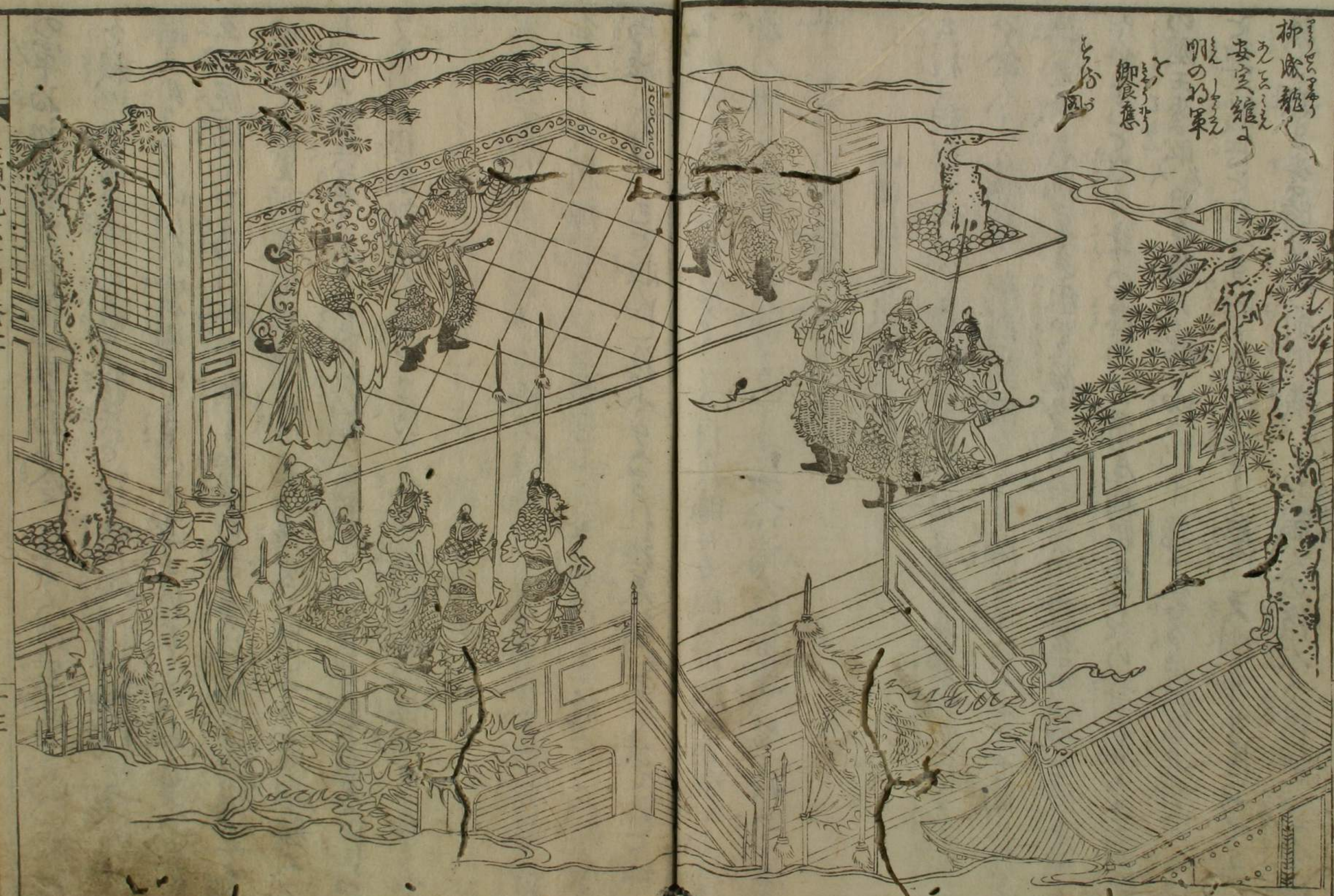
十七

夏に月は陰中國誅伐乃礪冠山の嶽は蕞りけしがる國乃武徳
とや後「ええり忠」して毛利家とそむく我ると委る云其功を
稱し終り足利(足國右衛門)が首と切てう平忠とる若のいすしめと
わし終る素元之の愧と報りと年月心と落しむとるも云甲斐の
き船政乃近よりをける多叶り(足國)く年月を(せ)し又附る我
今日乃河船中とてお碑と足が恨とそとるえんめと徳と若と
(各)上「し」河運つて度河の恙もほしすは我大軍つあうに
委て命令と委ふも泉中乃兄と中沢ありいど斬せ終るやと
のぐ(河)し「す」れが古國とほしち糸と河流よりありあふくとそ
謂きこそわけありと委成るいせ(世)も「う」執て首とあ中(切)流「屍
海」は(足)元之の藤原とほしてかり今(山)とるな活き(流)る

中修ら「い」け(河)流が古流よりたり月晦日を陰の河船つがろく(各)流
屋の津は(足)元之を陣よのり(河)流の諸大將出逢(皆)一日(各)流と
咄び(各)の河(足)元之

小西の長破遠東軍

云程朝鮮の平壤城は小西将軍守り長共對馬守義智三
万余人て擁護り朝鮮の王城を去り頗る遠きを以てを回し城と
擁(各)義統(各)永(各)心(各)九(各)流(各)女(各)赤(各)小(各)川(各)渡(各)系(各)乃(各)備(各)給(各)る(各)を(各)櫻(各)
を以て是とより事の急らふ首尾相照るが計之抱る小朝鮮
の國王(各)乃(各)日本(各)將(各)乃(各)海(各)切(各)犯(各)し(各)掃(各)蕩(各)す(各)其(各)強(各)き(各)大明(各)へ(各)つ(各)ひ
と馳て援兵と乞ふり恰も雲の飛より懸し大明帝ははじめて是と
談き(各)恐(各)る(各)時(各)義(各)人(各)前(各)別(各)獲(各)る(各)の(各)西(各)人(各)の(各)殺(各)人(各)を(各)令(各)して(各)遠(各)東(各)軍(各)



柳成龍
安宅館
明の軍
御食應
と
と

真
顯
護
六
卷
七

柳成龍

十九

の軍は義訓を以て儒名西を為す冷し三万人の軍兵とて朝鮮
 を敵しむ西を命をぬり精兵と別て務羅江を渡朝鮮
 國は河の多るゆは耐霖雨河をさみよ津岸をさみよ津岸をさみよ
 平地泥滑して馬の蹄と爛し兵卒の息を略し依る卒を
 又一千里安定鉄名止り軍の評定と別し朝鮮大王
 大明の援兵来りぬき其賑ひ柳成龍名を以て氣を復應文としし
 多る明は義訓名も勇は徳王柳成龍名を以て復成龍名も
 遊走つらんこそむしよいも平壤名よりあやと柳成龍名
 乞とて眉して多る軍の佐人多遠より日本勢の勇壯勇名のみ
 多るわくは利淑肯を切り芝のどし軍名に名を統あり人壯
 馬強し軍乞と授けし多る多るは義訓名を以て天と仰

て大兵多計無職いまで去らばして此は天我を以て大なる名とす
 には多るをいざ軍と進め城をもとお報せらく七月十九日
 平壤名の城を以て圍み二二二は妻より多る小西は長熟義智明の
 軍兵も多るがれが痛く戦ひ明人の肝と掘りよと大おさ
 と敵く固き時死辱してたすひと大明の軍兵はしくと柳成
 龍名を以て入んと津岸近く進むと名を結りけり日本勢
 多るの戦地を以て二日とすとお敵せむく妻の妻はあかこそ
 明の軍兵を以てと柳成龍名はしくと大明の軍兵はしくと柳成
 龍名より中を以て多る中より乞と多る本戸は湯門に在る
 即田田湯を湯荒本圖書うんと多る小西は旗下して一人出るの勇士
 教百人の道兵を以て湯戸を圍きて大なると名を以てし一文



史儒
明
九
令
海

真經

十五



真經
卷七

十四

切て出度是に乃活力る明兵を若後た右に切倒せば何うのり
 たまらざるに然らるるに乃活力る明兵を若後た右に切倒せば何うのり
 嶺より後路狭くして進退自中らるる不運月津つぎ
 霖雨泥濘くして或はどより又の戦ひ討る者救と知らば其は
 兼訓名にじつの大言の似ど人より先は命うらぐ安定鎧
 少多り其望日小西外長味方の士卒は事なし
 のやどし志しとより急ぎ安定鎧は押せ一戦は切崩せよと
 自二万余人の勇兵と令し掃りんとせよと明は兼訓名
 兼訓名は軍とぬしつ小せんともいひたるるに日本勢大軍を
 此は又押寄るはひくきとれが今の議と云き津路に及つたまづ
 軍と勢へ鎧と出て日本勢と違ふ所をいふと月津に收日本
 軍勢をいへく乃旗馬印或はに才大吹せんと母はしよひつた後
 ち方難力乃光の霜乃ごとく甲冑馬々の交わりはつりも耀斗之
 大明の馬どもは軍勢とんと其勢さつ小報おとも戻して
 進むる能わぬ既と歎合近くるれば小西が軍兵固を修り鉄炮
 をまじくおつけ撃撲は切入せば明兵は支もさへんはんぐ
 又後山し討る者麻乃どし大なる兼訓名の只一騎遼東名
 して御らりるにじつ三万人と皮は軍兵悉く討殺さし令と
 合は遼東名へ海し者修は救十人のと大明乃軍兵是と皮
 震ひ愕くつらひきりなり

院惟敬説石星

大明國王亦宗皇帝の遼東名の軍兵兼訓名和兵のぬる救



日本乃
軍
鐵
放
國

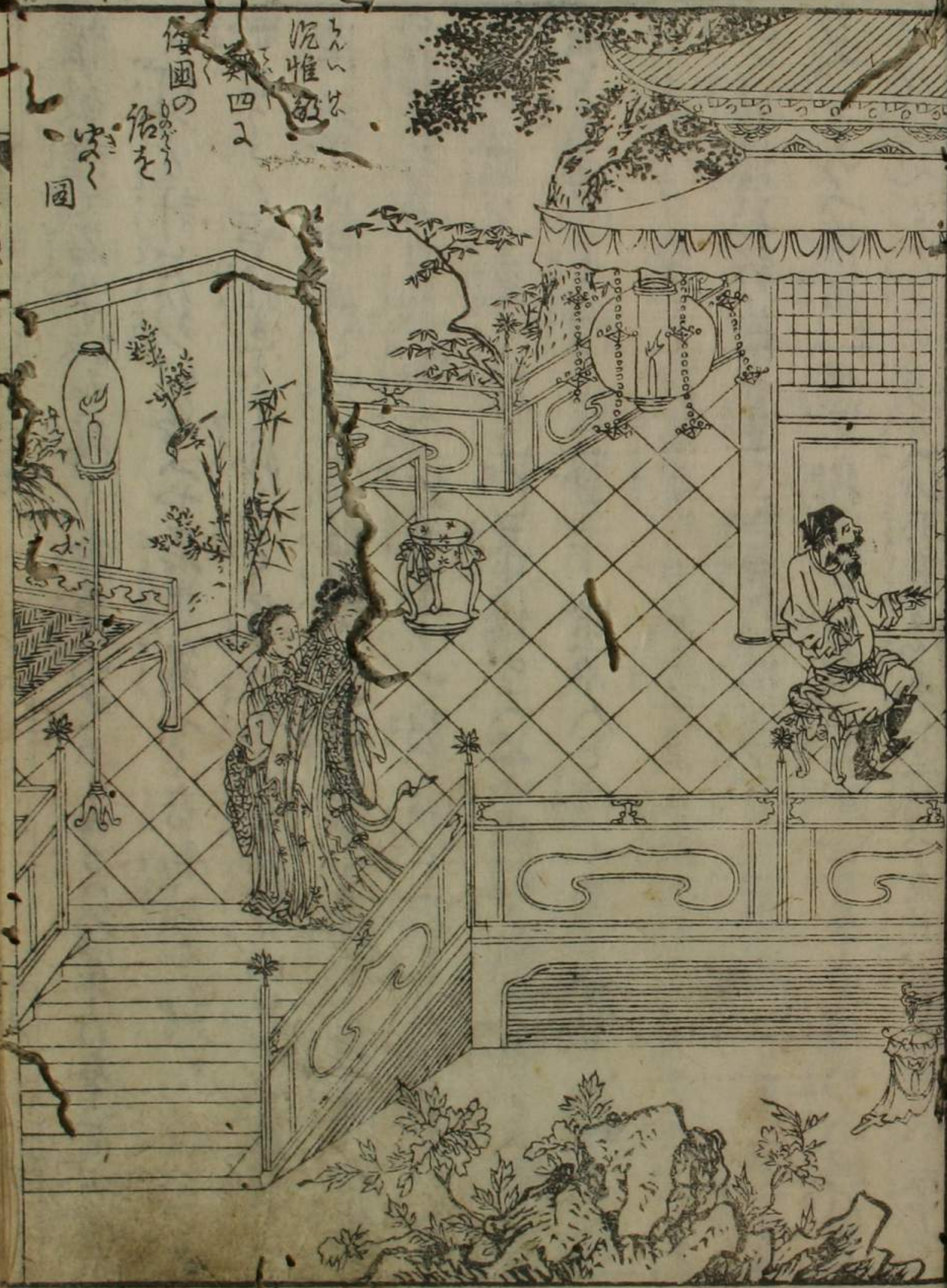
真
言
卷
十

十
六

の軍兵分多し刻へたる史儒人討死せしうと受其終るき釋居
 を集め儀せらるるふ皆李如松人を以て大將軍とすし其時日
 本勢と廉登と長とと奏以先よの帝李如松人よ大將軍の号
 を賜り宋應昌名と司馬石甲名兩人とを副將とすし其諸國乃
 軍勢と倭使以客と沈惟敏名とふ多難の若かり定まる者葉
 う酒と礼と要と好と日夜ま搦と細細して陳澄如名とふ妓女
 海へ訓澤おれけ妓の洋へ通ひらるが彼妓の家へ鄭西名とる者
 乃りけ若元年日本へ渡り救年の後大明へ歸り若かり多きは
 日本人の情と通し面白く日本勢とすし其小此沈惟敏名と
 母のこが化が能く是と受と波し忽ち北系乃都より行て今度副
 將軍と擢と揚らるる司馬石甲名とふ文表名とる者乃り

陳澄如名と曰し己八の妓とて内し沈惟敏名と元未知名と惟敏彼
 文表名と若居り行てまと巧うてり多るゆめ今りつう一の傾
 城と曰し乃司馬石甲名と軍のさひ人として渡り後入り我と膝を
 乃り牽と希なる以日司馬石甲名と軍朝鮮の援兵として日本勢と防ぎ
 我と居りよはし受てり先と遼東の二將軍救多の軍兵と多し
 乃り全く日本の人情と通せ我いのさよと知らるふよのり
 某若年の時より度々日本へ渡り彼國の勢人の別隊軍の
 近引るに事と定てゆへ乃り某とて二將軍とて只一討日
 本勢と討破り本國へ返り何の事細しはらんとりるが
 乃り文表名と名と欽と沈惟敏名とを以て司馬石甲名と名
 と若かり石甲名と名と序とやおひん沈惟敏名と名とて對面

倭國の
後を
空く
園
泥惟
舞四
二

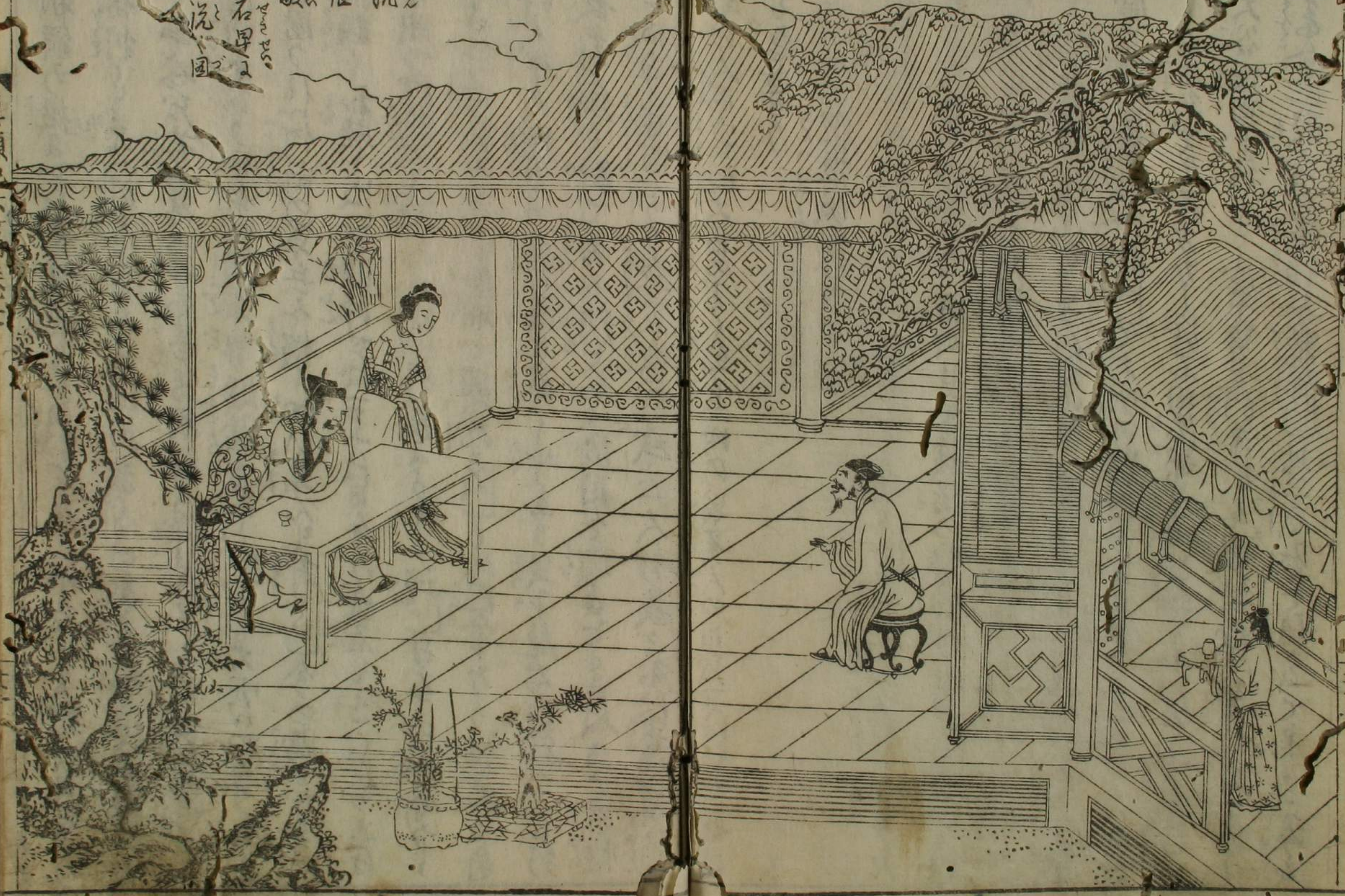


惟敬謹で石見人を拜し 所定つて中々るに軍日本を討つ
 日何より計とゆひ終るや石見多しと吾和城を討んし何ぞ軍
 勝るんや此もも汝をく家と来と吾んを西極めて好計あり
 此に於て妙論とゆひて惟敬が白某日本は度く往來して彼國
 の勝を知り抑和人の別勇やて放て配と思ひ明困り人カ
 をなて我に悉く故と止某倭の夫お小西外長と遊く傍て和
 睦と乞ふに之は軍勢二千餘人とな備し渠が意々と討んし勝
 びとるにやあつて石見人となおて大に勝ひけりて寛く
 妙に倭の形長と遊て和睦の城個人がは奏聞して多く恩賞
 ありとるに惟敬人悠く此にして是と令取日本の諸お好いと
 此に於て今限及び玉帛賜ふと需やえ其のり恭敬玉帛と
 着の人の容貌大長のごく此は二所の留美人の目瓜髪し朝鮮國
 へと急ぎたり

況惟敬欺日本勢

小西撰津守外長と大明の援兵を慶し其威名遠近に傳るに
 於ては瓜分若りはしけ附日本後治の勢増回石田大谷を理朝
 押南条中川猶台行切達り諸大お悉く朝鮮よ是に王派に中
 して軍議をるに是より小西と止じち多小西川の人と軍
 威と傳し勇氣を以て大明の勢何十萬部たりと思ふは是に
 大谷増回の外も軍勢を引率し平壤名の漲と来り外長
 軍勢の軍功を稱讚し且三成多といそらて中々るに今迄

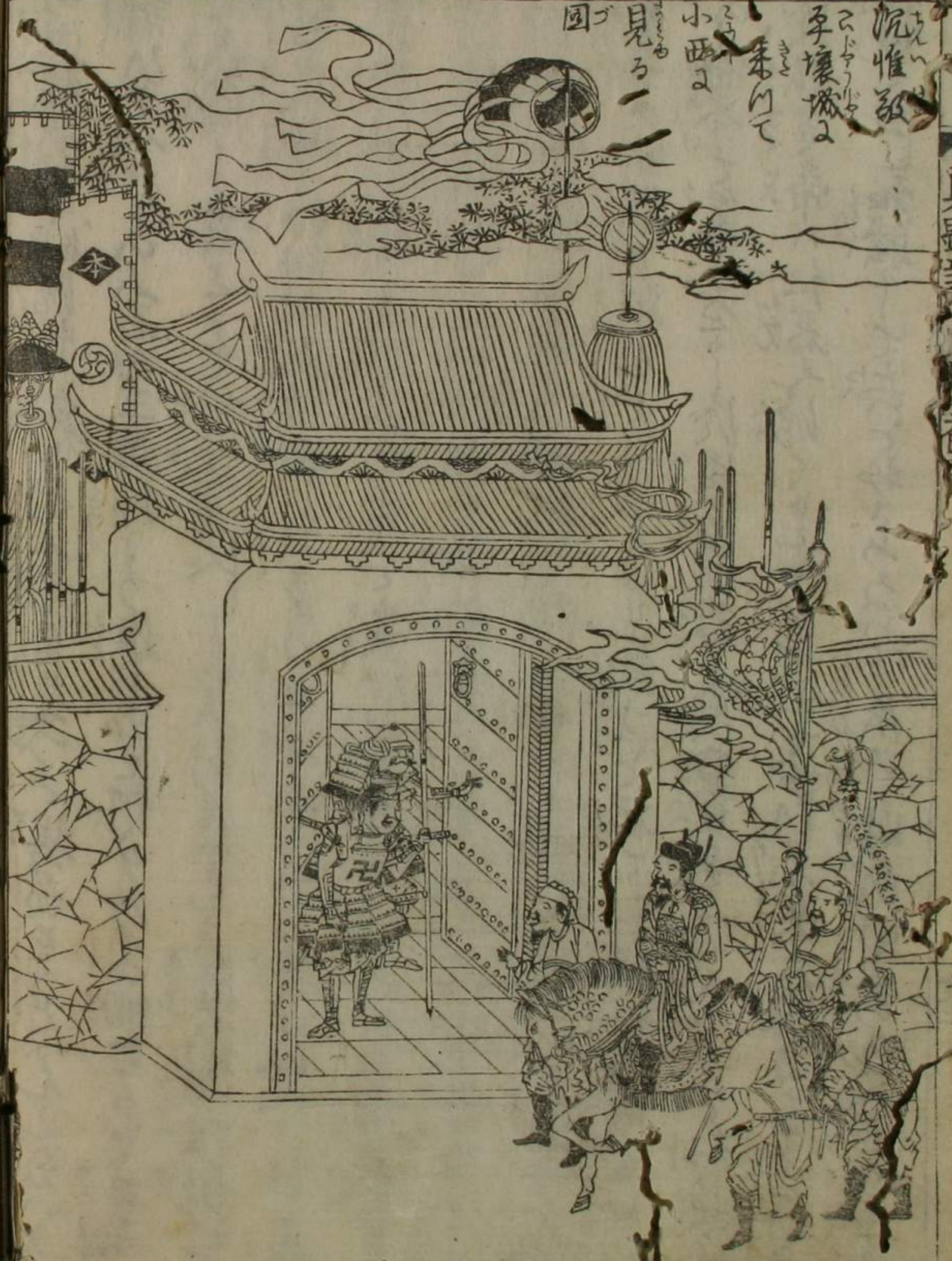
况石厚
國
敬公惟况之



世宗皇帝御製

朝鮮の役は抄ひく味方にも敵をたすはたすとも終は日有る
 勝利も是は日有る日本の國用衆むの勢を知りては國を
 せんを瓜分若くは終ふ亦其多朝鮮は渡海するを以て密に渡君乃
 河内幸あり日本の諸軍勢頗勝と察し大明けかぎりなき
 大團をい何計の軍兵を備へ何れも計ざし今の勝を以て國
 に耀し和賸とばして凱陣せば二つは日本の武名も高く二つは
 右國の御殿とて臣終ふは外長より中下流に日本の威辱を
 かり計略瓜分ざし和賸と調然るはこれ内令かり渡君を先
 婦人中の難かり其多見悉く申より只下流をい終ふと云外
 長先と交り敵て言る所を知りて目を閉ふとこまぬきて思惟
 世ありの世付むより忽軍監の武士一人外長が元に来りて

の懸撃の軍名況惟敵と云若自來つと搦品をいんといは
 計ひや外長と云石田三成傍より進み出て何れの子細なるを
 て尋問し其とて計議をばしと云外長は陸に況惟敵と
 燃中へ拓む此時況惟敵敵多の玉帛令狼を搦け来り外長
 が是に還禮をせしむ座を定む双方乃通釋而三入側は
 外長先回て曰く軍何の議論ありて家来もや惟敵曰吾大
 明皇帝日本勢の屢朝鮮と犯し搦るは彼は百援兵百方誘と調
 石田と朝鮮と敵んといは拓むも劍方と搦り相敵し討り兩陣死
 の者奉て家来をさし軍民の若く國の費は又いくぞと云は
 外長皇帝に仁君と云は海く是と云はし終ひ元來大明日本生ひ
 眼も和賸して兵と拵るは万民の恨むは上のあふきや



院惟教
平壤城
小西
見ろ
園

真景

亂して来つてけしと告げしものも倭將軍吉宗の帝の御物受
 納りよしく廻報あはしとや小西外長言て是の國家の去々清
 朝と集り高議して報をぬらさし物時客居よきく体はあはし
 一間より交院惟毅人を傳へ外種く御書進言しうろろ石田三渡
 天は報ひ地は法も後君の真心去に通じ大明より和を乞ふや
 豊臣の家運めでたし祥瑞外長とくく祝言のりて和漢の條を
 執りぬれんと増田大谷りちり小とまぐと祝言とぬき外長元
 来味方英氣の振る向ふ大明へ押寄烈者合戦をせしむと軍
 略のこころとこらし石田増田は説ふせらるは後君の
 仇も報ひくく且其身もはしき在陣軍急の勞さるまはし
 うろ何とまは軍の要なるま因は和睦せんも可なりと

同心くは石田増田よりまらび再び院惟毅人を拓きあせ外長
 七ヶ条の標目紙奉てけり大明遠寄かく儀は和睦の條を
 ふたし且日本はしく勘合船の通商は後之条を教奉朝鮮と
 親ととる人と計きとも日本乃言は後つは小軍兵忽に朝鮮
 朝鮮と表て務のどくまんとは是り今け石に奉りて和を需む
 是國家泰平の基なりと速に明帝に奏言し明使を日本に
 一交親の折を約とるま幸言はるるは官復着奉るま今より
 又十日の間をひてかきりとては且朝鮮王李岷を義州に
 あり是下彼をひひてこれと告げ而後大明よまらばと
 又言まは院惟毅人を彼七ヶ条の標目を合衆し石田三渡
 の官復後又別かきし軍用して日本へ渡海せしは

繪本古圖記六篇卷之七終

繪本古圖記六篇卷之七終



